

## RC-12 「いわて三陸オリジナルのジオツーリズムプログラムの開発と実践」

課題提案者：いわて三陸ジオパーク推進協議会、研究代表者：総合政策学部 准教授 伊藤英之  
研究メンバー：鈴木正貴、豊島正幸、渋谷晃太郎、吉野英岐（総合政策学部）  
松本潤（いわて三陸ジオパーク推進協議会）

### <要旨>

本研究は、三陸沿岸が有する名勝風景や生物多様性、伝統芸能などの地域資源及び東日本大震災における課題、成果、取り組み状況等を整理統合し、地元関係者のニーズを基にいわて三陸ジオパーク構想のコンセプトと整合性を図りながら、いわて三陸独自のツアープログラムの検討した。具体的には、三陸ジオパーク推進協議会と協働で、「地球科学と防災フェア」を大船渡市、釜石市で開催し、ジオパークの地元への普及・定着活動を行った。

### 1 研究の概要（背景・目的等）

ジオパークとは、「地球（ジオ）と人間とのかかわりを学べる大地の公園」（高木、2012）のことであるが、近年では、ジオが生んだ貴重な地域資産を有する地域が、それらを保全・活用し、地域全体の経済・文化活動を高めていく社会活動を指すことが多い。

ジオパークにおける地域資源とは、地層や岩石、それらが構成する風景や地形、地下水や温泉、鉱物資源などの天然資源の他、地域において育まれてきた動植物やそれらが複合して形成した生物多様性、さらには、鉱工業・農林水産業、文化や社会など、地域に存在するすべてが包含される。すなわち、ジオパークの資産となるものは、地域そのものであり、地域資源を有効に観光や教育、防災に生かしていく場所と、それを発展させる地域活動がジオパーク活動であると言える。さらに、これらの地域資源を見て回り楽しむオンサイトツーリズムがジオツーリズムであり、ジオツーリズムを通じた持続的な地域活性化がジオパーク活動の本質である。

三陸地域においては、2011年7月より「いわて三陸ジオパーク構想」の検討が本格化され、関係各機関との調整をへて2012年10月には従来の「いわて三陸ジオパーク」エリアに加え、新たに青森県八戸市から宮城県気仙沼市まで拡大し、三陸ジオパーク構想として、2013年5月に日本ジオパークネットワーク（JGN）へジオパーク申請を行っている。

一方、ジオパークの招致が日本で積極的に活動し始めたのは2010年頃からであり、ジオパークという用語自体、一般の観光客はもとより、地域住民にさえ浸透していない可能性が示唆されている（深見、2011）。

そこで我々は、今後、三陸ジオパークの観光拠点となる大船渡市ならびに釜石市において、ジオパーク認知度の向上と、地域住民自らが地域資源の再認識する環境整備の一環として、三陸ジオパーク構想の普及啓発イベントを実施した。

### 2 ジオパークにおける普及啓発イベントの重要性

ジオパーク活動においては、地元住民の積極的な関与

は欠かせない。ジオパーク先進地である伊豆半島ジオパークにおいては、地元住民の協力を得て「ジオ菓子」や「ジオ井」などの新名物が誕生し、それら目当てに伊豆半島を訪れる観光客も少なくない。

従って、地元へのジオパーク活動の認知度向上と、地域における活動の核となる人材の発掘・育成は、ジオパークの持続的発展において必要不可欠である。

本研究においては、三陸ジオパーク構想の地元における認知度向上を目的として、三陸ジオパーク推進協議会、岩手大学工学部、気象庁盛岡地方気象台などと共同で開催した。

### 3 岩手の地質を理解するー中生代を作ろうー

三陸ジオパーク構想を構成する主要地質は、古生代シルル紀から中生代白亜紀までと非常にバリエーションに富む。これらのうち、こどもたちの関心が高いと思われる恐竜が存在した中生代白亜紀にターゲットを絞り、楽しみながら白亜紀をイメージできるアイテムを考案した。具体的には、林（2006）の手法を地質学に適用し、パンケーキの恐竜の型とカラーシュガーやチョコペンを使った「おいしい中生代のジオラマ」作成や、歯科用印象剤で型取りしたアンモナイトや三葉虫のマウントを用いた化石グミを作成した。



写真1 化石グミ実験の様子（大船渡市）



写真2 化石チョコ作成実験の様子（大船渡市）



写真4 釜石市イベントにおけるジオラマ作成の様子



写真3 作成した化石グミの一例

化石グミは、2012年1月28日にいわて三陸ジオパーク推進協議会（当時）主催による「地球科学と防災フェア in 大船渡」においてまた、「おいしい中生代ジオラマ」は2012年7月29日の「地球科学と防災フェア 2012 in 釜石」で実施し、小学生を中心として好評を博した。

#### 4 今後の展開

今回のイベントを通して、直接的に三陸オリジナルのジオツーリズムの開発には至っていないが、このような地道なイベントの継続的開催によって、地元へのジオパークの認知度向上に繋げていくと同時に、地域主体のジオパーク活動を推進できるきっかけ作りを行っていきたいと考えている。

将来的には、地域住民が主体となって運営する視察・学習コースの選定や体験プログラムの考案や、地域住民を巻き込んだガイドの養成などにより、本来の地域資源である自然環境やそれらを生かした生活文化などを体感できるフィールドとして、さまざまな視察や学習旅行に対応できる地域づくりと交流人口の拡大に繋げていきたい。

三陸ジオパーク構想は、2013年5月に日本ジオパークネットワークに認定申請を行った。

認定及びその後の世界ジオパーク認定に向けては、地域における活動実績や受入れ体制の整備状況が重要な審査項目であることから、ジオツーリズムプログラムの充実とモニターツアーの実施による受入実績を積み重ねる必要がある。

今後は、そのための準備作業として、まずは地域資源や復興状況等を整理分析し、地元関係者のニーズと大学が有する豊富な情報や知見を融合したツアープログラムの開発に着手する。また、モニターツアーによる参加者の感想や意見をプログラムに反映させることにより、一般観光客にも通用し得る内容へと充実を図っていききたい。

#### （参考文献）

- 深見聡・有馬貴之（2011）；九州のジオパークに対する観光客のイメージ－4つのジオパークにおける観光客アンケートから－。地域環境研究、長崎大学環境教育研究マネジメントセンター年報、47-54。
- 林信太郎（2006）；世界一おいしい火山の本、小峰書店、127pp。
- 高木秀雄（2012）；三陸時ジオパークを－未来のいのちを守るために－。早稲田大学ブックレット、84pp、早稲田大学出版会。